

大学生の多元的アイデンティティと適応機能の関連

西田若葉*・沖林洋平・大石英史

The relationship between plural identity and adaptive function
of undergraduates.

NISHIDA Wakaba, OKIBAYASHI Yohei, OISHI Eiji

(Received September 30, 2011)

本研究の目的は、従来の確立された「達成」アイデンティティおよび多元的アイデンティティのあり方について把握し、両者がどのように適応機能と関連するか検討することであった。大学生374名を対象に、質問紙調査を用いてアイデンティティ・ステータスおよび自己意識の分類と、心理的 well-being の測定を行った。その結果、従来の達成ステータスなど〈現在の自己投入〉が高いアイデンティティは自己の仮面性を意識しておらず、従来未確立と捉えられてきた D-M 中間・拡散ステータスは自己の仮面性を意識しているアイデンティティであり、両者とも多元的自己意識をもつアイデンティティであることが示唆された。また、アイデンティティ類型による心理的 well-being については、達成ステータスだけでなく早期完了および D-M 中間の一部において、相対的に優れた側面があることが示唆された。

キーワード：アイデンティティの多元化、アイデンティティ・ステータス、自己意識、心理的 well-being

Abstract

The purpose of this research was to grasp the state of the conventional established "achievement" identity and the plural identity, and examine how both are connected with these identities and an adaptive function. The questionnaire survey was performed to classify identity status and a sense of self, and measure psychological well-being for 374 undergraduates. As a result, identity status which 〈present commitment〉 was high e.g. conventional "achievement status" had been unconscious of the masked self. In contrast conventional "diffusion status" and "D-M status" had been conscious of the masked self identity. And it was suggested that these identity statuses had the sense of prural self. Moreover, it was suggested that not only "achievement status" but "foreclosure status" and the part of "D-M status" were superior in the several subscale of psychological well-being.

Key words: pluralized identity, identity status, self consciousness, psychological well-being

1. 問題・目的

Erikson (1959 小此木, 1973) によるアイデンティティの説明のひとつとして、「自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信」が挙げら

*山口大学大学院教育学研究科

れる。Erikson (1959 小此木, 1973) が提唱し、日本に取り入れられたアイデンティティ理論は、青年期の実態をとらえる指標として様々な検討がなされてきた。日本における代表的な研究には、青年の集団活動や友人関係との関連をとりあげた宮下 (1998)、日常生活における「居場所」を捉えることでアイデンティティの問題に迫ろうとする小沢 (2002)、アイデンティティ発達を「個」と「関係性」の側面から捉える山田・岡本 (2009) などが挙げられる。従来、多くのアイデンティティ研究では、個人と社会両方から承認され、どちらにおいても一貫性を持つあり方が「アイデンティティの確立」として捉えられ、適応的であると考えられてきた。

日本におけるアイデンティティに関する研究は2種類に大別されると考えられる。ひとつは水野 (1998) や谷 (2001) のように、研究者による観点からアイデンティティの数量的または質的なデータをとることでアイデンティティ概念の構造化や測定を試みる研究である。もうひとつは鑑 (2002) や河井 (2008) のように、アイデンティティ概念や研究を振り返り、社会、歴史、文化的な要素と複雑に関係していることを述べている研究である。鑑 (2002) は、アイデンティティ概念は多くの領域において様々なレベルや深さで同時的に捉えられる概念であると述べている。これらの研究を総合すると、自己の確立に関する感覚的側面だけではなく、自己概念そのものや確立のための心的活動の側面によっても構成される概念であると考えられる。実際、これまでの先行研究において、アイデンティティ概念を自己概念そのものとして捉えているものも存在する (畑野, 2010; 三浦・橋本・林, 2009)。このようなアイデンティティ研究における中心的テーマの一つとして、「アイデンティティの多元化」がある。

アイデンティティに伴う自己の多元化については近年の研究でとりあげられている。岩田 (2003) はアイデンティティを自己意識として捉え、都市圏における若者の自己意識を仮面性と戦略性の観点から類型化し、1999年の調査と比較した結果、一元的自己を持つ若者が減少し、多元的自己を持つ若者が増加していることを明らかにした。また、辻 (1999) は若者の対人関係のあり方として「関係切り替え志向」をとりあげ、その特徴として場面によって自分を使い分けているが、表層的、希薄な対人関係であると言えないことを指摘した。そして、図1の (b) のような複数のアイデンティティが「ゆるやかに束ねられた」構造を提唱した。このような多元的自己ないし多元的自己の様相は、Eriksonの理論を基盤としたアイデンティティ論においては、アイデンティティの未確立もしくは拡散状態として捉えられ、心理、社会的に不適応な状態であるとされてきた。そのため、精神医学の研究からは、青年期以降のアイデンティティの未確立を解離性同一性障害や自己愛性人格障害と関連づけて論じられることが多い。

しかし、小塩 (2002) によると、青年の自己愛傾向と友人からのイメージ評定の関連を Big Five によって検討した結果、「開放性」において自己愛傾向の高い群、低い群にかかわらず友人による評定に有意な差が見られなかったが、自己愛傾向の高い群は、自己愛傾向の低い群

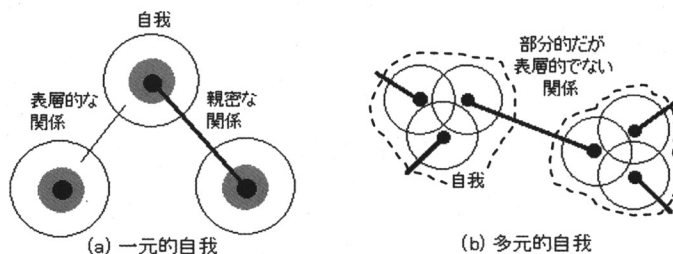


図1 辻 (1999) による自己構造の模式図

よりも自己評定と友人による評定のギャップが小さいことを明らかにした。また、松下・橋村（2009）は、大学生の自己愛傾向とアイデンティティの感覚について検討し、自己愛傾向が高いほどアイデンティティ達成の感覚を高く持っていることを示唆した。現代のアイデンティティ形成プロセスについて、溝上（2008）は生活・人生に関わる場が「多領域化」したことによって、アイデンティティの複数化・断片化・流動化といった特徴が作りだされると指摘している。さらに奥田（2010）は、そのような社会における時間的展望をとりあげ、従来の自己の一貫性が必ずしも有効ではなく、「Erikson(1959)のアイデンティティ理論でその諸現象を説明的にカバーすることには限界が来ている」と述べている。また、畑野（2010）は従来アイデンティティ拡散として捉えられていた自己の多元化が現代社会に適応した形である可能性を指摘している。

以上の観点から、多面的アイデンティティが、従来捉えられてきたように心理社会的に不適応であるかを検討する必要があると考えられる。本研究では、従来の「達成」アイデンティティおよび多面的アイデンティティのあり方について把握し、両者がどのように適応機能と関連するか検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者 Y大学の大学生374名（男性177名、女性197名）を調査対象者とした。

調査時期 2010年12月7日～14日

尺度と手続き 本研究では質問紙調査を行った。質問紙を配布し、調査の回答が講義の評価等に関係ないことや個人情報への厳守等について説明した上で回答を求めた。なお、以下の尺度を用いて6件法で評定させた。

1) 同一性地位判定尺度：加藤（1983）が、Marcia（1966）のidentity statusアプローチをもとに、アイデンティティ確立の程度を判定するために開発した。この尺度は、〈過去の危機経験〉〈現在の自己投入〉〈将来の自己投入への希求〉（それぞれ4項目ずつ）の得点の程度の組み合わせによって6種類の同一性地位（アイデンティティ・ステイタス）に分類する（表1を参照）。

2) 一元的-多面的自己意識の類型項目：高橋ら（2001-2003）の調査によって用いられた項目の一部である。青年の自己意識を一元的もしくは多面的なものとしてとらえるために、多面性、戦略性、仮面性の有無を問い、5種類の自己意識に分類する（表2を参照）。

3) 心理的 well-being 尺度：西田（2000）が、心理的 well-being 概念を「人生におけるポジティブな適応機能」として位置づけた Ryff（1989）の理論を参考に開発した。「人生における目的（人生における目的と方向性の感覚）」、「人格的成長（発達と可能性の連続上において、新しい経験に向けて開かれている感覚）」、「自律性（自己決定し、独立、内的に行動を調整できるという感覚）」、「積極的な他者関係（暖かく、信頼できる他者関係を築いているという感覚）」、「自己受容（自己に対する積極的な感覚）」、「環境制御力（複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚）」の下位尺度から構成されている。本研究では心理社会的な適応機能の指標として用いる。

表1 同一性地位判定尺度(加藤, 1983)によるアイデンティティ・ステータスの分類

	過去の危機経験	現在の自己投入	将来の自己投入の希求
達成	高い(20点～)	高い(20点～)	
A-F中間	中程度(19～15点)	高い(20点～)	
早期完了	低い(14点以下)	高い(20点～)	
モラトリアム		低～中程度(～19点)	高い(20点～)
D-M中間		中程度(12～19点)	中程度(14～19点)
拡散		低い(～12点)	低い(～14点)

(危機: いかなる役割, 職業, 理想等が自分にふさわしいかについて, 迷い考え試行すること)

(自己投入: 自己定義を実現し自己を確認するための, 独自の目標や対象への努力の傾注)

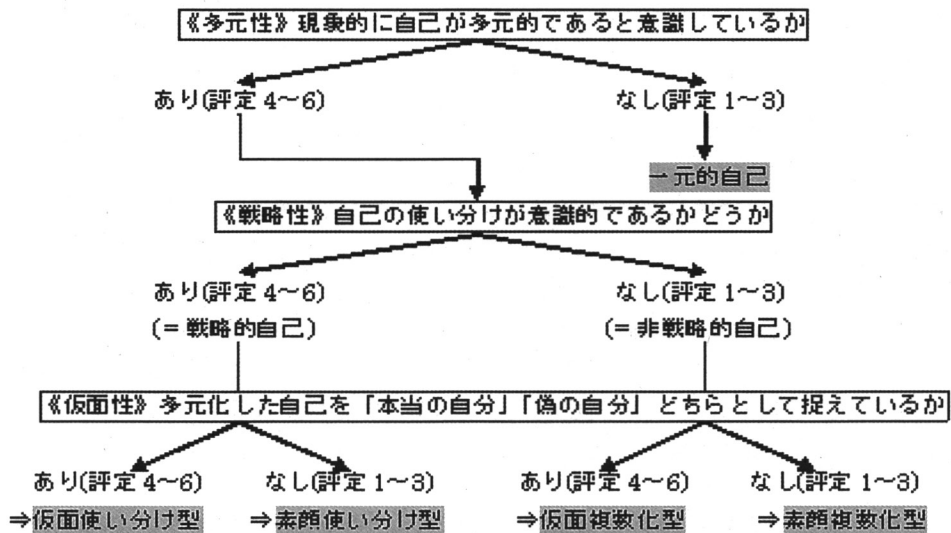


図2 高橋(2003)による自己意識の類型

3. 結果

3.1. アイデンティティ・ステータスおよび自己意識の分類

アイデンティティ・ステータスおよび自己意識の分類を行い人数を集計した(図3、図4)。

3.2. アイデンティティ・ステータスおよび自己意識の類型の対応

アイデンティティ・ステータスおよび自己意識がそれぞれどの類型と類似しているかを検討するため、アイデンティティ・ステータスと自己意識を対応分析にかけた上でクラスター分析を行い、4次元(因子寄与率: 48.81%)の結果を採用した(図5)。

3.3. アイデンティティ・ステータス、自己意識の類型および心理的 well-being の関連

3.3.1. アイデンティティ・ステータスにおける D-M 中間の類型化

アイデンティティ・ステータスの分類は、D-M 中間が全体の6割であり、他のステータスに比べて圧倒的に多い。この点については、加藤(1983)が同一性地位判定尺度を開発した時点から指摘されており、本尺度を用いた先行研究の多くは D-M 中間に分類される。従来は、

豊嶋（1992）や伊藤（2002）のように、青年期の D-M 中間の多さについて、アイデンティティの確立という発達課題が未達成の傾向にあるという見解が多くなされてきた。

しかし、D-M 中間が多く見られる理由は、D-M 中間そのものが一元的な特徴を有するものではないという可能性がある。なぜなら、豊嶋（1992）や伊藤（2002）など、同一性地位判定尺度（加藤，1983）を用いた研究では、調査対象者の半数以上が D-M 中間に分類されるからである。

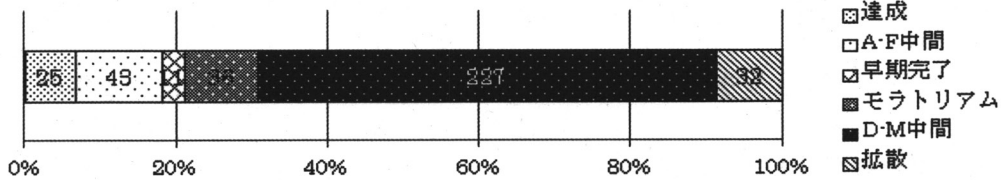


図3 各アイデンティティ・ステータスの人数と比率

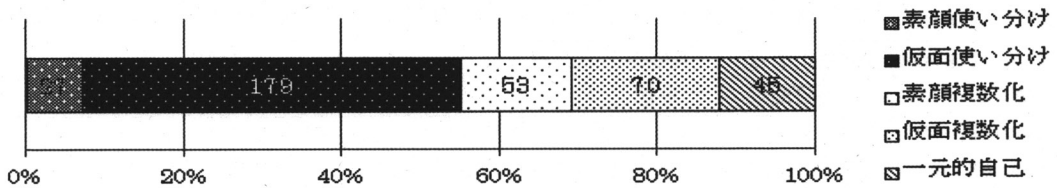


図4 各自己意識の人数と比率

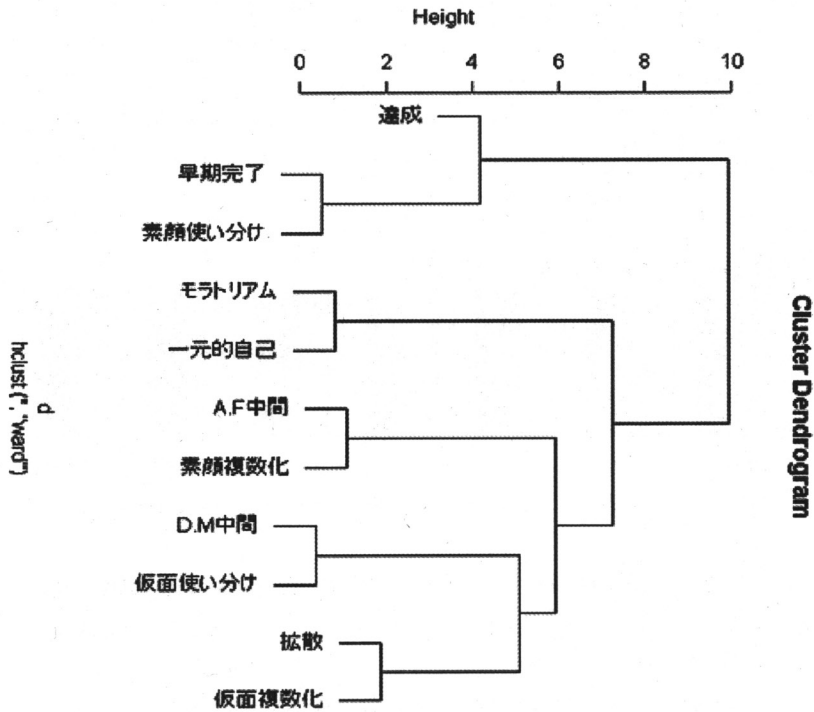


図5 アイデンティティ・ステータスおよび自己意識の種類のクラスター分析

また、溝上(2008)によるとアイデンティティ・ステイタス論を提唱した Marcia (1966) は拡散状態に分類される青年において、文化的に適応した拡散アイデンティティの類型が存在することを示唆している。溝上(2008)はこれを、現在の課題に対する探求を行い、永続的な自己投入を行わないアイデンティティ類型であるが、状況の有利・不利に応じて流動的に対処して社会に適応できる側面を持つことを指摘している。

そこで本研究では、同一性地位判定尺度の〈過去の危機経験〉得点 (M=16.50, SD=2.94) を基準とし、D-M 中間を「危機高群」(20点以上)、「危機中群」(15点以上19点以下)、危機低群(14点以下)に分類し、アイデンティティの多元的な特徴を検討する。

3.3.2. アイデンティティ・ステイタスおよび自己意識の類型別の心理的 well-being 得点

アイデンティティ・ステイタスおよび自己意識の分類ごとに下位尺度得点の平均値および平均得点率を算出した(表2、表3、図6、図7)。

表2 各アイデンティティ・ステイタスにおける心理的 well-being 得点の平均値 (SD)

下位尺度 IS(人)	人生における目的	人格的成長	自律性	積極的な 他者関係	自己受容	環境 制御力
達成(25)	41.24(6.77)	44.48(4.43)	31.24(4.29)	29.52(6.36)	24.52(4.09)	24.80(6.98)
A-F 中間(43)	39.86(5.16)	43.19(4.68)	31.44(5.64)	26.91(5.21)	26.95(5.84)	25.56(3.62)
早期完了(11)	41.27(4.35)	42.18(3.54)	32.91(4.50)	28.82(3.04)	29.09(3.29)	25.36(4.40)
モラトリアム(36)	35.14(5.88)	42.75(4.01)	30.97(6.24)	26.75(6.42)	23.61(7.30)	23.50(3.38)
D-M 中間(227)	30.94(6.48)	39.08(4.73)	27.99(5.37)	25.11(4.77)	22.99(5.23)	22.48(3.60)
[危機高群(37)]	29.51(6.49)	41.24(4.02)	27.38(6.79)	24.70(6.31)	19.89(4.96)	22.16(3.85)
[危機中群(128)]	30.84(6.89)	39.14(4.41)	27.84(4.85)	25.41(4.15)	22.77(5.15)	22.38(3.51)
[危機低群(62)]	31.98(5.31)	37.92(4.97)	28.55(5.43)	24.63(4.97)	25.29(4.43)	22.84(3.64)
拡散(32)	23.78(5.25)	36.03(4.90)	26.75(6.01)	24.34(5.12)	21.25(7.12)	20.63(4.79)

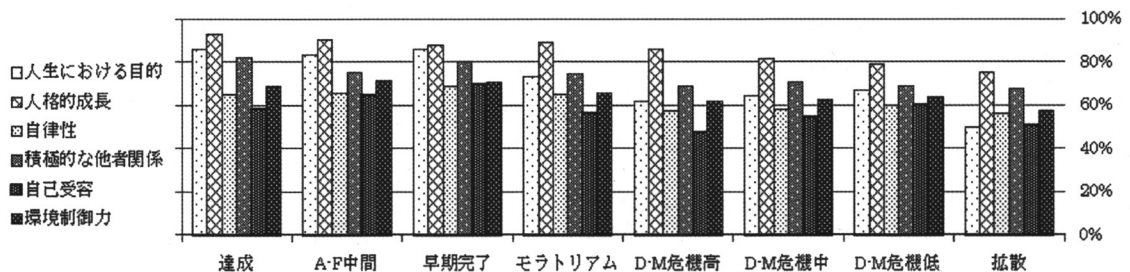


図6 各アイデンティティ・ステイタスにおける心理的 well-being の平均得点率

表3 各自己意識における心理的 well-being 得点の平均値 (SD)

下位尺度 自己意識	人生における目的	人格的成長	自律性	積極的な 他者関係	自己受容	環境制御力
素顔使い分け(27)	38.22(6.31)	42.44(5.04)	30.67(6.39)	27.63(5.19)	27.41(6.22)	25.15(4.54)
仮面使い分け(179)	32.31(7.44)	40.05(4.78)	28.28(5.84)	25.11(5.37)	23.04(5.47)	23.18(3.87)
素顔複数化(53)	34.57(6.94)	41.06(4.93)	30.45(5.20)	27.74(4.58)	26.25(6.46)	23.89(3.87)
仮面複数化(70)	30.29(8.20)	39.80(4.52)	27.31(5.04)	25.70(4.64)	20.71(5.39)	21.33(3.66)
一元的自己(45)	32.91(7.18)	38.20(6.97)	31.20(6.38)	25.47(4.93)	25.22(6.03)	22.64(3.89)

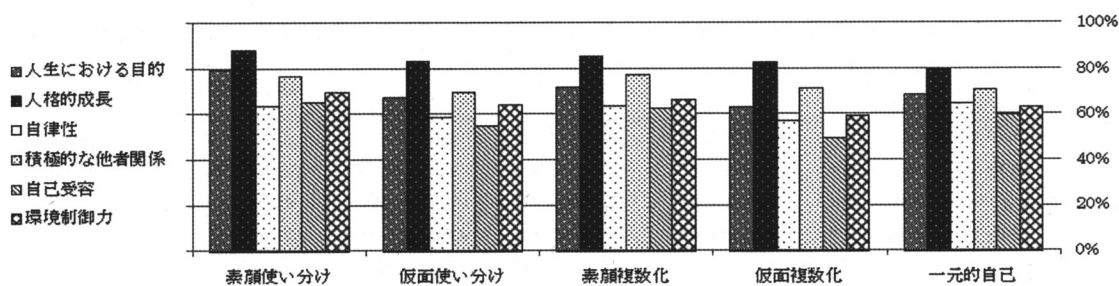


図7 各アイデンティティ・ステイタスにおける心理的 well-being の得点率

3.4. 各類型における心理的 well-being 下位尺度得点の検討

3.4.1. アイデンティティ・ステイタスによる心理的 well-being 得点の比較

D-M 中間の 3 類型を含めたアイデンティティ・ステイタス (8) × 心理的 well-being 下位尺度 (6) の 2 要因分散分析を、ANOVA4 を用いて行ったところ交互作用がみられ ($F(35,1830) = 6.571, p < .001$)、すべての心理的 well-being 下位尺度得点におけるアイデンティティ・ステイタスの単純主効果が有意であった (目的: $F(7,2196) = 45.03, p < .001$; 成長: $F(7,2196) = 9.50, p < .001$; 自律性: $F(7,2196) = 5.830, p < .001$; 受容: $F(7,2196) = 10.07, p < .001$; 環境: $F(7,2196) = 3.397, p < .005$)。多重比較 (表 4) によって検討したところ、下位尺度得点の比較は以下のようになった。

「人生における目的」得点は達成・早期完了・A-F 中間がモラトリアム・D-M 中間の 3 群・拡散より有意に高く、モラトリアムが危機高群・危機中群・拡散より有意に高く、D-M 中間の 3 群すべてが拡散より有意に高かった。「人格的成長」得点は達成・A-F 中間・モラトリアムが危機中群・危機低群・拡散より有意に高かった。「自律性」得点はアイデンティティ・ステイタスによる有意な差がみられなかった。「積極的な他者関係」得点は達成が D-M 中間の 3 群全て・拡散より有意に高かった。「自己受容」得点は、A-F 中間・早期完了が危機高群・危機中群・拡散より有意に高く、危機低群が危機高群・拡散より有意に高く、達成が危機高群より有意に高かった。「環境制御力」得点は A-F 中間が拡散より有意に高かった。

3.4.2. 自己意識の類型による心理的 well-being 得点の比較

自己意識の類型 (5) × 心理的 well-being 下位尺度 (6) の 2 要因分散分析を、ANOVA4 を用いて行ったところ交互作用がみられ、「人生における目的」「人格的成長」「自律性」「自己受容」の心理的 well-being 下位尺度得点における自己意識の単純主効果が有意であった。多重比較 (表 5) によって検討したところ、下位尺度得点の比較は以下のようになった。

「人生における目的」得点は、素顔使い分けが一元的自己・仮面使い分け・仮面複数化より有意に高く、素顔複数化が仮面複数化より有意に高かった。「人格的成長」得点は、自己意識の類型による有意な差がみられなかった。「自律性」得点は、一元的自己が仮面使い分け・仮面複数化より有意に高かった。「自己受容」得点は、素顔使い分け・素顔複数化が仮面使い分け・仮面複数化より有意に高く、仮面使い分け・一元的自己が仮面複数化より有意に高かった。

表4 ステイタス×心理的 well-being の二要因分散分析における多重比較 (*: $p<.005$, **: $p<.001$)

	人生における目的	人格的成長	自律性	積極的な他者関係	自己受容	環境制御力
達成-A-F	$\zeta(66)=1.06$	$\zeta(66)=0.99$	$\zeta(66)=0.16$	$\zeta(66)=2.01$	$\zeta(66)=1.87$	$\zeta(66)=0.58$
早期	$\zeta(34)=0.02$	$\zeta(34)=1.23$	$\zeta(34)=0.89$	$\zeta(34)=0.37$	$\zeta(34)=2.44$	$\zeta(34)=0.30$
モラト	$\zeta(59)=4.52^{**}$	$\zeta(59)=1.28$	$\zeta(59)=0.20$	$\zeta(59)=2.05$	$\zeta(59)=0.67$	$\zeta(59)=0.96$
高群	$\zeta(60)=8.47^{**}$	$\zeta(60)=2.41$	$\zeta(60)=2.88$	$\zeta(60)=3.59^{**}$	$\zeta(60)=3.46^{**}$	$\zeta(60)=1.97$
中群	$\zeta(151)=8.90^{**}$	$\zeta(151)=4.71^{**}$	$\zeta(151)=3.00$	$\zeta(151)=3.63^{**}$	$\zeta(151)=1.55$	$\zeta(151)=2.13$
低群	$\zeta(85)=7.31^{**}$	$\zeta(85)=5.35^{**}$	$\zeta(85)=2.19$	$\zeta(85)=3.99^{**}$	$\zeta(85)=0.63$	$\zeta(85)=2.65$
拡散	$\zeta(55)=12.63^{**}$	$\zeta(55)=6.11^{**}$	$\zeta(55)=3.25$	$\zeta(55)=3.74^{**}$	$\zeta(55)=2.37$	$\zeta(55)=3.02$
A-F-早期	$\zeta(52)=0.78$	$\zeta(52)=0.57$	$\zeta(52)=0.84$	$\zeta(52)=1.09$	$\zeta(52)=1.22$	$\zeta(52)=0.11$
モラト	$\zeta(77)=4.04^{**}$	$\zeta(77)=0.37$	$\zeta(77)=0.40$	$\zeta(77)=0.13$	$\zeta(77)=2.86$	$\zeta(77)=1.76$
高群	$\zeta(78)=8.63^{**}$	$\zeta(78)=1.67$	$\zeta(78)=3.50$	$\zeta(78)=1.90$	$\zeta(78)=6.08^{**}$	$\zeta(78)=2.92$
中群	$\zeta(169)=9.58^{**}$	$\zeta(169)=4.43^{**}$	$\zeta(169)=3.94$	$\zeta(169)=1.64$	$\zeta(169)=4.59^{**}$	$\zeta(169)=3.48$
低群	$\zeta(103)=7.43^{**}$	$\zeta(103)=5.12^{**}$	$\zeta(103)=2.82$	$\zeta(103)=2.22$	$\zeta(103)=1.62$	$\zeta(103)=2.65$
拡散	$\zeta(73)=13.30^{**}$	$\zeta(73)=5.92^{**}$	$\zeta(73)=3.88$	$\zeta(73)=2.12$	$\zeta(73)=4.72^{**}$	$\zeta(73)=4.08^{**}$
早期-モラト	$\zeta(45)=3.44^{**}$	$\zeta(45)=0.32$	$\zeta(45)=1.09$	$\zeta(45)=1.16$	$\zeta(45)=3.07$	$\zeta(45)=1.04$
高群	$\zeta(46)=5.41^{**}$	$\zeta(46)=0.53$	$\zeta(46)=3.11$	$\zeta(46)=2.31$	$\zeta(46)=5.17^{**}$	$\zeta(46)=1.80$
中群	$\zeta(137)=6.21^{**}$	$\zeta(137)=1.87$	$\zeta(137)=3.11$	$\zeta(137)=2.09$	$\zeta(137)=3.89^{**}$	$\zeta(137)=1.83$
低群	$\zeta(71)=5.31^{**}$	$\zeta(71)=2.52$	$\zeta(71)=2.57$	$\zeta(71)=2.47$	$\zeta(71)=2.24$	$\zeta(71)=1.49$
拡散	$\zeta(41)=9.66^{**}$	$\zeta(41)=3.40$	$\zeta(41)=3.40$	$\zeta(41)=2.47$	$\zeta(41)=4.33^{**}$	$\zeta(41)=2.62$
モラト-高群	$\zeta(71)=4.64^{**}$	$\zeta(71)=1.24$	$\zeta(71)=2.96$	$\zeta(71)=1.69$	$\zeta(71)=3.07$	$\zeta(71)=1.10$
中群	$\zeta(162)=4.40^{**}$	$\zeta(162)=3.69^{**}$	$\zeta(162)=3.20$	$\zeta(162)=1.37$	$\zeta(162)=0.87$	$\zeta(162)=1.14$
低群	$\zeta(96)=2.91$	$\zeta(96)=4.45^{**}$	$\zeta(96)=2.23$	$\zeta(96)=1.95$	$\zeta(96)=1.55$	$\zeta(96)=0.61$
拡散	$\zeta(66)=9.03^{**}$	$\zeta(66)=5.34^{**}$	$\zeta(66)=3.36$	$\zeta(66)=1.91$	$\zeta(66)=1.88$	$\zeta(66)=2.29$
高群-中群	$\zeta(163)=1.33$	$\zeta(163)=2.18$	$\zeta(163)=0.48$	$\zeta(163)=0.74$	$\zeta(163)=2.97$	$\zeta(163)=0.23$
低群	$\zeta(97)=2.23$	$\zeta(97)=3.09$	$\zeta(97)=1.09$	$\zeta(97)=0.07$	$\zeta(97)=5.02^{**}$	$\zeta(97)=0.63$
拡散	$\zeta(67)=4.58^{**}$	$\zeta(67)=4.17$	$\zeta(67)=0.50$	$\zeta(67)=0.29$	$\zeta(67)=1.09$	$\zeta(67)=1.23$
中群-低群	$\zeta(118)=1.43$	$\zeta(118)=1.52$	$\zeta(118)=0.88$	$\zeta(118)=0.98$	$\zeta(118)=3.15$	$\zeta(118)=0.57$
拡散	$\zeta(158)=6.89^{**}$	$\zeta(158)=3.04$	$\zeta(158)=1.07$	$\zeta(158)=1.05$	$\zeta(158)=1.48$	$\zeta(158)=1.72$
低群-拡散	$\zeta(92)=7.28^{**}$	$\zeta(92)=1.68$	$\zeta(92)=1.60$	$\zeta(92)=0.25$	$\zeta(92)=3.58^{**}$	$\zeta(92)=1.96$

表5 自己意識×心理的 well-being の二要因分散分析における多重比較 (*: $p<.005$, **: $p<.001$)

	人生における目的	人格的成長	自律性	自己受容
素顔従-仮面従	$\zeta(204)=6.13^{**}$	$\zeta(204)=2.08$	$\zeta(204)=2.07$	$\zeta(204)=3.78^{**}$
素顔従	$\zeta(78)=2.77$	$\zeta(78)=1.05$	$\zeta(78)=0.16$	$\zeta(78)=0.88$
仮面従	$\zeta(93)=6.27^{**}$	$\zeta(93)=2.09$	$\zeta(93)=2.65$	$\zeta(93)=5.29^{**}$
一元的	$\zeta(70)=3.90^{**}$	$\zeta(70)=3.12$	$\zeta(70)=0.39$	$\zeta(70)=1.61$
仮面従-素顔従	$\zeta(230)=2.58$	$\zeta(230)=1.15$	$\zeta(230)=2.49$	$\zeta(230)=3.66^{**}$
仮面従	$\zeta(247)=2.57$	$\zeta(247)=0.32$	$\zeta(247)=1.23$	$\zeta(247)=2.96^{**}$
一元的	$\zeta(222)=0.65$	$\zeta(222)=1.99$	$\zeta(222)=3.13$	$\zeta(222)=2.34$
素顔従-仮面従	$\zeta(121)=4.21^{**}$	$\zeta(121)=1.24$	$\zeta(121)=3.08$	$\zeta(121)=5.44^{**}$
素顔従	$\zeta(96)=1.46$	$\zeta(96)=2.52$	$\zeta(96)=0.66$	$\zeta(96)=0.90$
一元的	$\zeta(113)=2.46$	$\zeta(113)=1.50$	$\zeta(113)=3.64^{**}$	$\zeta(113)=4.22^{**}$

4. 考察

4.1. アイデンティティ・ステイタスおよび自己意識、心理的 well-being の全体的な特徴

本研究の調査における調査協力者は、9割以上が大学一年生で構成されており、調査協力者全体に共通する特徴は大学一年生に共通する特徴でもあると考えられる。

アイデンティティ・ステイタスの類型では D-M 中間が最も多く、続いて A-F 中間、モラトリアム、拡散、達成、早期完了という順に比率が高かった。3.3.1. でも述べたように、同一性地位判定尺度で D-M 中間が最も多く分類されることは先行研究（豊嶋, 1992；伊藤, 2002）においても指摘されている。同一性地位判定尺度における D-M 中間は〈現在の自己投入〉、〈将来の自己投入の希求〉が共に中程度であることと、「文化的に適応した拡散型アイデンティティ」が現在における探求は行っても永続的に自己投入をしないという記述は共通するアイデンティティの一種を示していると考えられる。そのため、D-M 中間には、Erikson の理論とは異なるアイデンティティの様相が含まれているのではないかと推測される。

自己意識の類型では、多元的自己意識における仮面使い分け型が最も多く、続いて仮面複数化型、素顔複数化型、一元的自己、素顔使い分け型という順に比率が高かった。自己意識の多元性については意識している場合が多く、多元的自己意識における自己の戦略性と仮面性については、戦略性を意識している場合は仮面性も意識している場合が多く、戦略性を意識していない場合は、仮面性を意識していない場合が多いと考えられる。

アイデンティティ・ステイタスと自己意識のタイプの対応については図5の通り、ある程度の対応がみられた。2つのタイプにおける各水準から考察すると、〈現在の自己投入〉が高い達成、A-F中間、早期完了は自己の仮面性を意識していない多元的自己意識であるのに対し、拡散、D-M中間ステイタスは仮面性を意識した多元的自己意識だと考えられる。モラトリアムは一元的自己との対応が見られた。

4.2. アイデンティティ・ステイタスの分類基準および心理的 well-being について

今回、D-M 中間ステイタスを「過去の危機経験」の程度によって群分けするという独自の手法を用いた8種類のアイデンティティ・ステイタスによって検討を行った。これらのステイタスの分類基準は〈現在の自己投入〉の程度である。モラトリアム・拡散以外の分類基準には〈過去の危機経験〉が加わり、モラトリアム・D-M 中間3群・拡散の分類基準には〈将来の自己投入への希求〉が加わる。分類基準の程度の違いによって有意差がみられた心理的 well-being 下位尺度得点は、「人生における目的」「人格的成長」「自己受容」と考えられる。ステイタスの分類基準による心理的 well-being 下位尺度得点の傾向に着目すると、以下の事が考えられる。〈過去の危機経験〉が高程度である場合、「自己受容」得点は低い。〈現在の自己投入〉が高程度である場合、「人生における目的」「人格的成長」「自己受容」得点は高い。〈将来の自己投入への希求〉が高程度である場合、「人生における目的」得点は高い。

アイデンティティ確立において、現在や将来において目標を成し遂げるための努力や何かに打ち込むことは心理的 well-being の一部の機能を高めるのに対し、自分の価値観や自己について思い悩んだ経験は自己受容を阻害することを示唆した。

自己意識のタイプによる心理的 well-being については、自己の多元性・戦略性・仮面性の分類基準に着目すると、以下の事が考えられる。自己の多元性が無い、つまり一元的自己の方が多元性もしくは仮面性のある自己意識に比べ、「自律性」得点は高い。自己の仮面性の無い方が、仮面性があるより「人生における目的」・「自己受容」得点は高い。

2つのアイデンティティタイプを総合すると、Erikson (1959) や Marcia (1966) の理論にお

けるアイデンティティ達成の様相は多元的であり、複数の自己を仮面性のない本当の自分として捉えることで、人生の方向性や自らの発達に対する意識が〈現在の自己投入〉をしていないステイタスに比べて相対的に高くなると考えられる。対称的に、拡散や D-M 中間の様相は、達成と同様に多元的な自己意識ではあるが、自己を仮面性のある偽の自分を持っていると意識し、一部の適応機能が達成と比べて相対的に低いことが示唆された。ただし、心理的 well-being 尺度における「自己受容」得点の結果から、D-M 中間の一部については達成に比べて心理的 well-being が総じて低いわけではないことが明らかになった。また、A-F 中間や早期完了といった〈過去の危機経験〉をあまり持たないステイタスの方が、達成より優れた適応機能の一部をもつことが明らかになった。ありのままの自分を受け入れる意識や、独立的に行動する、状況を利用して自分の能力を活かすといった意識は、従来理論における未確立のアイデンティティの方が優れているものもみられたため、心理・社会的に適応的なアイデンティティのあり方は従来の達成ステイタス以外にも見出せることが示唆された。

課題として、適応機能の指標や同一性地位判定尺度の測定の問題を検討することが挙げられる。また、今後は多元的アイデンティティも含めたアイデンティティの状態像を、人生の発達段階全体にわたって捉える枠組みを作る必要があると考えられる。

参考文献

- 浅野智彦 (2005). 物語アイデンティティを越えて? 上野千鶴子 (編) 脱アイデンティティ 勁草書房 77-101.
- Erikson, E.H. (1959) Identity and the life cycle. *Psychological issues* No.1, New York, International Universities Press
- エリクソン, E.H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性 誠信書房
- 畑野 快 (2010). アイデンティティ形成プロセスについての一考察——自己決定を指標として—— 発達人間学論叢, 13, 31-38.
- 伊藤敦美 (2002). 青年期の自己同一性に関する研究——職業選択と学業意識の視点から—— 現代社会文化研究, 25, 231-247.
- 岩田 考 (2003). 現代都市青年の自己意識類型——戦略性と仮面性からみた多元化する自己の諸相—— 高橋勇悦 都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析 274-301.
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌——失われた10年の後に—— 勁草書房 196-209.
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 河井 亨 (2008). エリクソンにおけるアイデンティティ概念関連の検討——1960年代以降の日本社会における青年文化論・若者文化論を背景として—— 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 60, 159-160.
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 551-558.
- 松下姫歌・橋村祐治 (2008). 大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連について 広島大学心理学研究, 8, 271-280.
- 三浦巧也・橋本創一・林 安紀子 (2009). 青年期における自己の気づきに関する調査研究——大学生の過去の振り返りを通して—— 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 61, 167-

173.

- 宮下一博 (1998). 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連
千葉大学教育学部研究紀要, I, 教育科学編, 46, 27-34.
- 宮下一博・小林利宣 (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学
研究, 29, 297-305.
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学——他者の森を駆け抜けて自己になる—— 世界思想社
- 水野正憲 (1993). 自我同一性の方と適応 日本性格心理学会大会発表論文集, 2, 47.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教
育心理学研究, 48, 433-443.
- 野村信威・橋本 幸 (2006). 青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連 日本
パーソナリティ心理学会 パーソナリティ研究, 15, 20-32.
- 岡本裕子 (2003). 「ケア」論から成人期の発達をとらえる試み——アイデンティティ生涯発達
論を中心として—— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3, 205-213.
- 奥田雄一郎 (2009). 現代社会における自己の多元化と大学生の時間的展望 共愛学園前橋国
際大学論集, 1-11.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係と適応, 友人によるイ
メージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司 (2007). 自己愛傾向と自己イメージ・友人によるイメージ感の差異との関連 中部
大学人文学部研究論集, 18, 19-33.
- 小沢一仁 (2002). 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東
京工芸大学工学部紀要, 人文・社会編, 25, (2), 30-40
- 小沢一仁・高木秀明 (1988). 同一性地位移行の追跡研究についての展望及び同一性地位移行
モデルについての考察 横浜国立大学教育紀要, 28, 69-85.
- 岡田 努 (1993). 自我同一性早期完了地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要 人文・
社会科学編, 35, (1), 57-68.
- Ryff, C.D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of
psychological well-being *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol57, No.6,
1069-1081.
- Ryff, C.D.・Keys, C.L (1995). The structure of psychological well-being revisited *Journal
of Personality and Social Psychology*, 69, 719-727.
- 白石 賢・白石小百合 (2006). 幸福度研究の現状と課題——少子化との関連において ESRI
Discussion Paper Series No.165
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元的自我同一性尺度 (MEIS)
の作成—— 教育心理学研究, 2001, 49, 265-273.
- 鐘 幹八郎 (2002). 青年期の多面性とイニシエーション 臨床心理学, 2, 719-724
- 豊嶋秋彦 (1995). 自我同一性の発達の變化と学校教育・教育相談 (II) ——大学期における
同一性地位の発達—— 弘前大学保健管理概要, 17, 5-28.
- 豊嶋秋彦・芳野晴男・遠山宣哉 (1992). 自我同一性地位の発達の變化と学校教育・教育相談
弘前大学保健管理概要, 14, 21-33.
- 辻 大介 (1999). 若者のコミュニケーション変容と新しいメディア 橋元良明・船津衛 (編)
子ども・青少年とコミュニケーション 北樹出版 11-27.

山田みき・岡本祐子 (2009). 「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成 広島大学心理学研究 No.8 89-98.